

2025 年 7 月 20 日 聖霊降臨節 第7主日礼拝

メッセージ「ほんとうに大切なこと」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネの手紙Ⅱ 5 - 6節

今日は参議院議員選挙の投開票日です。そのために、投票権をお持ちの方の中には、既に朝から投票に行かれたという方もおられるかもしれません。今日までの選挙期間中に、インターネット上だけではなく、新聞のコラムなどでも紹介されていた一つの詩があります。第二次世界大戦中に、ナチスに抵抗して投獄されたドイツの牧師、マルティン・ニーメラー (Martin Niemöller 1892~1984) が、戦後にかつての自分自身を振り返って述べた言葉です。

ナチスが共産主義者を連れ去った時、私は声をあげなかった。私は共産主義者ではなかったから。

彼らが社会主義者を牢獄に入れた時、私は声をあげなかった。私は社会主義者ではなかったから。

彼らが労働組合員らを連れ去った時、私は声をあげなかった。私は労働組合員ではなかったから。

彼らが私を連れ去った時、私のために声をあげる者は誰一人残っていませんでした。

というものです。彼は幸いにして強制収容所での生活を生き延びて、このような言葉を残すことができましたが、かつての自分自身への深い反省が込められている言葉だと思います。そしてこの言葉は80年後の今の日本社会においても、また差別と排外主義が広がりつつある世界中の国々においても、大きな警告となって響いているように思われてなりません。今の日本社会ではどうでしょうか。既に差別され、排斥され、よそへ連れ去られようとしている人たちが、たくさん出て来ているのではないのでしょうか。

ここ数年、様々な選挙が行われる度に、「選挙」そのものの質が急速に、著しく下がって来ているように感じます。ポスターにしても公約にしてもそうですが、政治的な信念や確固たる政策があるというのではなく、むしろ何を言えば人気が出るか、票を獲得することができるか、という一点で「票取り合戦」が行われているようです。候補者にしても、嘘をついたり、デマを流したりしても平気で、それこそ当選さえしたら、公約を守るところか掌を返すことすら、珍しくはなく、慣れてしまいました。

「物価高で、生活は全然楽にならない」という社会の現状の中で、鬱屈した不満をどこにぶつけたらよいのか、そのような不満のはけ口を求める要求が、今回の差別に満ちた選挙を産んでしまっているように感じています。

候補者も政党も、大衆受けすること、人々の耳に今、聞こえの良いこと、心地よいことしか言わなくなっています。また、それを聞く人たちも自分たちの聞きたいことしか耳に入りません。だから、「今がこんなに苦しいのは、一部の誰かのせいだ」という極端に短絡的な理屈を鵜呑みにしてしまう。自分で考えることをしない…。インターネットの力によって、そのような流れにますます拍車がかかっています。ですが、それは強力な権力者による「ファシズム（束主義）」というよりも、もっともっと衆愚的な大衆迎合主義（ポピュリズム）に陥っているような気がしてなりません。

「政治のことは難しくてよく分からないから、難しいことは賢い人たちに任せておいたら大丈夫でしょう」とばかり言っていたら、先ほどの M.ニーメラーの言葉のように、気付いた時には、「自分の周りには誰も残っていなかった」というような状況にもなりかねません。大切なことは自分で考えることであり、そのためにもよく見て、よく聞くこと、よく観察することが必要なのだと思います。そして本当に大切なことは、難しくて専門家にしかできないようなことでは決してなくて、今を生きている人たちが誰にでも可能なこと、小さな子どもたちからお年寄りまで、病気や障がいなど様々な状態の人たちにとっても、関わりのあることであり、実践可能なことであるはずではなければなりません。

この地球の生物の歴史を振り返ってみた時に、そこにある生命の「原則」は、強い者が生き残り弱い者が滅びるという「弱肉強食」ではなく、むしろ常に変化し続ける環境に適応できるかどうかという「適者生存」であると言われています。いつ何が起きて環境がどのように変化するかは、誰にも分からないわけですから、そのためには多様性がある方が全体としての生存可能性が高くなります。短期的な生産効率だけを考えると、同じような能力を持つ人々ばかりを一カ所に集める方が得策のように感じますし、「近代社会」というもの自体が、そのようにして形成されて維持され、今日まで発展してきたと言えますが、様々な側面でそのような社会構造自体の限界が来ているのが現代という時代の状況ではないでしょうか。「何故いじめはいけないのか。差別はいけないのか。排外・排他主義はいけないのか」。それは短期的には自分もいじめられたり、差別されたり、排斥されたりしないためですし、長期的には多様性が豊かである方が、社会全体、人類全体としての

存続可能性が高まるからだと言ったことができるでしょう。

さて、今回の聖書の言葉は、「ヨハネの手紙Ⅱ」でした。ページにすると 1 ページだけで、章立てもないほど短い文書で、その名の通り「手紙」として書かれています。1 節には「長老の私から、選ばれた婦人とその子どもたちへ」という送り主と宛先が記されています。そして今回の 5 節にも「婦人よ」とありますが、これらの「選ばれた婦人」とは、即ち「選ばれ、呼び集められた者たちの集会、教会」のことを指していると考えられ、この手紙は誰か特定の女性に宛てた手紙というのではなく、様々な教会へと回覧された手紙として、「教会に連なっている皆さんへ」という意味で書かれていると理解されています。

そして「あなたにお願いしたいことがあります」という手紙の常套句、定型表現が続き、「私が書くのは、私が新しく思いついたことではなく、私たちが初めから持っていた戒め、つまり、互いに愛し合う、愛し合おうということ」(5)だと述べられています。6 節でも同じ内容が繰り返されていますが、「愛とは、御父の戒めに従って歩むことであり、真理の内に歩むことです」とあります。6 節の最後「真理の内に」は、原文では「その内に」という指示代名詞で書かれていますので、それが「愛」なのか、「戒め」なのか、4 節にある「真理」なのかは、諸説あるようですが、いずれにしても「互いに大切にしよう」ということが述べられていることには変わりはありません。

この後の 7 節以降は、「イエス・キリストが肉体をとって来られたことを否定する人々に惑わされてはなりません」というような内容の話になっていきます。これは「難しい学問としての神学、理屈で考えて何か」ということではなく、「肉体を持った一人の人間として、2000 年前に確かに歴史の中を歩まれたイエス様が、その身をもって実際に隣人たちを大切にされた。しかも、時の権力者たちにとって都合な政治犯として、十字架に掛けられるまでに、人々を愛し抜かれ、大切にされたというその生き様を否定しない」ということです。言い換えれば、それこそ自然災害が、人間の予想を超えて、突然発生することがあるように、神様も人間の思いや考え、力をはるかに超えて、特別な方法で突然出現し、直接この世界、社会に介入して働かれることばかりに望みをかけない、ということです。戦争を止めるのも、飢えている人に食事を分けるのも、ケガや病気の人を手当てするのも、神様の仕事ではなく人間の仕事です。もしそれらが神様の仕事であり、人間はただ神様を賛美したり祈ったりするだけでよければ、イエス様が人間となって直接来られる必要は

ありませんでした。

イエス・キリストが身をもって示された神（御父）の戒めとは、人と人とお互いに愛し合う、大切にしようということであり、それは実際に実践可能だということです。だからこそ「互いに大切にしてください」、「やってみてください」と奨められています。すぐにはできそうになくても、諦めないでやってみることで、意外とできるかもしれない。それこそ、小さな小さな一歩であれば、何とかできるかもしれない。そうやって、目には見えなくても、神様が一緒にいて励まし力づけてくれていることに信頼して、やってみること。その時、きっとそこに神様が共におられることが感じられるのではないかと思います。

現代社会は、人と人とのつながり、関係性がバラバラに分断されていますから、「面倒なことにはかかわらない」ということが容易にできるようになりました。そして一介の市民、一人の消費者として、「誰にも迷惑をかけずに暮らすことができています」と感じておられる方も多いのではないかと思います。しかし、私たちが「豊かさ」と思って来たものの背景には、人やモノや環境、資源などの搾取があり、ただ立っただけで、誰かの足を踏みつけてしまわずにはいられないような社会になってしまっています。「誰にも迷惑をかけないこと」が望ましいのではなく、困った時はお互い様で、持ちつ持たれつの関係性の方が健全なのではないでしょうか。誰かを傷つけ排斥する社会は、いずれ自分も排斥され、誰もが生きていくことができなくなっていく社会です。本当に大切なことは、全ての命が大切にされ合うことを通して、活かされ合っていくことでしょう。そのようにして多様性が尊重されるようになってこそ、この社会には未来がある。むしろ、そうならなければ、この社会の持続可能性はないという所にまで、この地球は来てしまっているだろうと思います。

世界を創られた神は、「人が独りでいるのはよくない」と言って、「向かい合う同伴者」としてのパートナー、助け手、隣人を創られました（創世記 1:18）。そこから人間は、他者と共に社会を形成して暮らすようになったと創造神話は伝えています。だからこそ、私たちは分断と排除・排斥ではなく、向かい合い、助け合っていくことが求められているのだと思います。「本当に大切なこと」として、お互いに大切にしようこと、平和をつくる道へと、私たちは今日も神様によって背中を押され、歩みを進めてまいります。